

淑さんが見つからないように、和室と洋間の境の敷居は埋め込んである。

年をとっても普通の生活ができる。不自由な体に合わせた加齢住宅。

人間、年をとれば、少なからず、体力が落ちたり、若い時ほど自由に体が動かせなくなるもの。住む人の年齢とともに、家の造りも変化する……。

「加齢住宅」はこういう考え方から生まれた住環境の一つです。

熊本市池上町に住む益永増喜さん(六六)は三年前、自宅を加齢住宅に改築しました。きっかけは夫人の淑さん(六四)が脳卒中に倒れ、左半身不随という後遺症が残ったため。「お母さんに合った家造ろう」と言い出したのは同居している長男の成人さん(三三)。家族六人で弁当を持って住宅展示場を

### 高齢者にとって、

思いやりに囲まれ、安心して暮らす。



流し台が10センチ高いと水仕事も楽になる

見てまわり、パンフレット片手に知恵を絞って、約四ヶ月が費やされました。一段の高さが十二センチというゆるやかな段差の階段。両側には手すりを設置。寝室の引き戸は上から吊り、指一本で開閉できるようにしてあります。淑さんががまなくて済むよう、流しと便器は通常より十センチ高。食堂、居間、和

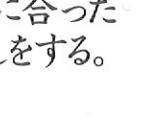
室は段差のないワンルームに設計されています。さらに、淑さん夫婦の寝室の隣室は、病気になるたときのことを考え、看護人のための部屋としても利用できるように設けてあります。「私はまだ元気だけれども、階段の高さは少々大変になってきていたんです。これから生きていく基盤が作れたような気がします」と増喜さん。将来は階段をエスカレーターにしようかと考えているとのこと。加齢住宅には機能だけでなく、「思いやる心」が備わっています。



御船町中原団地

### 県民にとって、

豊かな自然を享受し、風土に合った暮らしをする。



県営帯山A団地

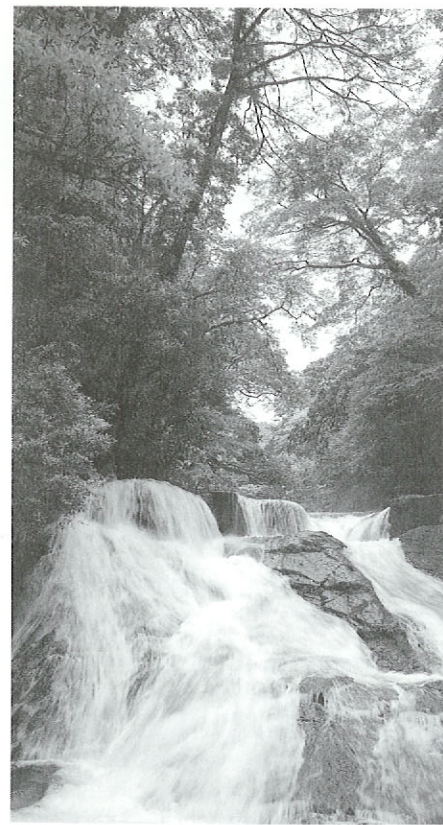
くまもとアートポリス  
くまもと型HOPE計画  
どちらもコンセプトは「熊本らしさ」

最近、県営帯山A団地や熊本市営新地団地、あるいは、御船町「風雅の里」や東陽村「ゆやの里」など、ユニークな建物が出現しています。それは、二つの事業計画が着々と進められているからです。

その一つ、「くまもとアートポリス」は後世に残るような文化的資産としての建造物を建設し、熊本の環境デザインの向上を目的としたもの。官・民を問わず、ビル、集合住宅、公園、橋な

これら二つの計画は、それぞれの住宅が、景観、町並み、住まい方といった生活環境についての提案を投げかけているといつてよいでしょう。そこには「熊本らしさ」の視点が欠かせないものとして存在します。

地域に視点を置き、豊かな住まいをつくっていくという運動は民間にも広がりを見せつつあります。新しい住まいのコンセプトは、熊本の持つ豊かな環境資源を見直すところから始まります。



特級水と折り紙付きの熊本の「おいか水」

都会の女性はミネラルウォーターや浄水器をよく買うんだぞうだ！

熊本の水のおいしさは、阿蘇山の火山性の地層で生成されている地下水にあると言われていますが、他の多くの地域では、表流水つまり河川に頼っているのが現状です。

表流水は地下水に比べ、有機物が多く、殺菌のためには、より多くの塩素を用いなければなりません。そして、この塩素が、嫌な臭いの原因となるだけでなく、実は水中の有機物と化学反応をおこし、トリハロメタンという発ガン性物質をつくり、都会の水道水に不安感を抱かせる原因ともなっている

### 女性にとって、

家族が安心して健やかに暮らす。



都会の人がミネラルウォーターや浄水器に走ってしまう気持ちも分らないではありません。幸いにして、熊本に住んでいる私たちは飲み水にお金をかけるなんて考えられない暮らしをしています。

さて、人間は一日に飲料水としてリットル、食物から一、五リットルの水分を摂取しています。水は生命の源。「水のおいしい所は食べ物もおいしい」とか。水がその地域に生きる全ての動植物の命を支えていると考えれば当然のことです。「おいしい水」の産するところに暮らし、安心して子どもを生み育てる幸せは、女性にとって最高の喜びです。また、このおいしくて豊かな水を子どもたちへ残してやるのも、熊本に暮らす者の役目に違いありません。

\*一九八三年に厚生省が実施した「おいしい水道」の調査結果において、熊本の水は「特別においしい水道」特級水にランクされています。

### 障害者にとって

障害者自身がハンデを感じないやさしい町。



「アメリカでは、車イスの人が町中にたくさんいるんです。それに老後の生活に関しても、とても楽天的です。」

竹田勉さん(三三〇)「身障連」は「米国障害者福祉研修事業」により、アメリカ視察に出かけた時の印象をこのように語ります。交通機関や施設が車イスでどこへでも移動できるように整備されているため、障害者がどんな町の中へ出かけていけそうです。

「僕たち障害者の言う、ありがとうには、すみません」という意味が含まれているんです。これは、言葉どおり「申し訳ない」ということ。今の日本では、障害者が町に出ることは「申し訳ない」ことなんです。障害者にとっての都市機能がしっかりしていれば、それが自立を促し、障害者に付き添う人の労力も少なくて済みます。階段の段差をなくすことは、心から言える「ありがとう」と、自然に振る舞う「やさしさ」をもたらします。そして、このことは、年をとって体が不自由になることに不安感を抱いている健常者にも



混み合う日でも大丈夫(カリフォルニア)

明るいニュースであるはずですが。

熊本県が推進している「やさしい町づくり」も決して障害者のためだけにありません。「熊本は福祉という点ではこれから。どんなことも初めからやれるからいいんです。期待しています」と竹田さん。障害者が元氣良く暮らせる町は、健常者が不安なく暮らすことのできる町でもあるのです。